

平成 23 年度
水源地域活性化調査委託業務

(大山ダム水源林再生、水源地域活性化事業)

報 告 書



2012 年 3 月

特定非営利活動法人 初島森林植物園ネットワーク

はじめに

NPO 初島森林植物園ネットワーク（通称初島林園）は、全国有数の人工林地帯・日田市にあって、スギ・ヒノキ一辺倒からの脱皮、自然林の保護と人工林の多様化を目指し活動してきた。

NPO 初島林園は、大山町とは前身の日田ユリノキ会時代から、平成6年、田来原“新しい森づくり”研究会のメンバーとして関係し、大山ダムとも、当初から、環境懇談会、モニタリング委員会、水源地域活性化ビジョン策定委員会、水源地域ビジョン推進委員会と長年にわたり関わっている。また、関連して、日田市のひた地域水源地域観光開発計画策定委員会などにも参加しており、大山ダム水源域で、何らかの行動を起こすべき状況にあった。

そのような中、平成23年度国土交通省の水源地域活性化調査業務委託に水源林整備を主題に応募したところ思いもかけず受託することができ、調査や計画策定だけでなく様々な試行的実施が実行できたことに感謝している。国土交通省担当者の御理解とご支援、水資源機構大山ダム建設所の全面的協働、地元の森林組合、高校生に実務体験を勧めた日田林工高校、そして何よりも森林所有者の御理解とご協力が得られなければこの事業は実行できなかった。それなりの成果を挙げることができたことについて、関係者の皆さんに改めて感謝申し上げます。

地域の活性化については、初島林園理事の吉良今朝芳先生に調査をお願いしたが、なかなかの難問である。東日本大震災を経験した日本人の人生観、幸福感の変化も当然加味されねばならないだろう。当事者側、定住者側の覚悟と言うものが問われるのも確かだろう。かつて大山町が福岡市に出向き、「大山町の梅干しを福岡市の学校給食に使ってこどもたちに食べさせてくれ」と交渉したことがある。「それは良いアイデアだ」と言うことになったが、「ところで、大山町のこどもたちは食べてるんでしょうね」と反問されておじゃんになったという話がある。下流域に支援を求めるにしても、水源地域住民の揺るがない生活態度が前提に無ければならない。これはもう、小手先の地域経済活性化の話とは別次元の話である。

ここに、事業報告することができたが、もとよりこれは一つの出発点、これからの長期にわたる活動の始まりに過ぎない。今後も継続して地域の森林整備に関わり続けていく覚悟ですので、引き続き諸賢の温かい御支援をお願いします。

NPO初島林園理事長 神川建彦 拝

目 次

I 調査活動の背景と目的	1
II 水源林保全・再生計画の企画・立案	3
1 調査事業	3
(1) 自然環境調査（ダム湖周辺）	3
① 地質	3
② 地形	6
③ 植生・土地利用・植物相	7
④ 昆虫相	18
⑤ 鳥相	30
(2) 水源林林況調査	34
① 自然林林況調査	34
② 人工林林況調査	36
(3) 社会環境・特用林産調査	43
(4) 造林樹種・導入候補種調査	48
2 人工林の針広混交林化～林産物多様化計画	58
3 上下流交流と協働の森づくり運動	59
III 水源林保全・再生計画の試行的実施	63
1 民有林における試行的実施	63
(1) スギ・ヒノキ林の除間伐促進	63
(2) クヌギ原本林の改良	63
2 水資源機構所有分における試行的実施	63
(1) ダム湖畔林の改良・整備	63
3 上下流交流と協働の森づくり運動	65
(1) 講演会	65
(2) ボランティア植樹祭	71
IV 水源林保全・再生活動の評価	74
1 活動の効果	74
2 関係者・参加者の評価や感想	74
V 長期的水源林保全再生・水源地域活性化計画	77
1 水源林保全・再生計画	77
(1) 立地区分・ゾーニング	77
(2) 今後の取り組み	77
2 地域活性化計画	79
(1) 関連諸計画との連動	79

I 調査活動の背景と目的

(1) 調査活動の背景

- ・大山ダム上流水源域での生業、伝統行事、地域社会の維持が困難になっている
- ・地元の水源地域住民も足下の自然文化資源を知らない。

→自然や文化を守る必要・知る必要

地域への興味と愛着の必要 知る・好きサイクル

- ・下流域住民は水源域の事情を知らない。→交流の必要

水源域住民だけでは、その自然や伝統を守れない。→連携・協働の必要

下の2件、ほとんどの日田市民が知らない。知らねば好きになれない、出逢わねば知ることも無い。
知る必要がある 出逢う必要がある



化石産地 夏休みの穴場（大山層約100万年前）



てんぽこなし（ケンボナシ）人工林多様化の象徴

様々な施策（活性化策）によって、特に大山町では、ダム関連の事業により様々な事業が展開され、生活基盤の整備のほか諸施設が建設され、上下流の交流の場となり、地元雇用の場ともなって一定の効果は見られる。

しかし、他の地域をみると、過疎化や高齢化などによって集落や地域社会、いわゆる「水源を支える里」の衰退はとどまらず、日々の生産活動だけでなく、祭りなどの伝統文化の継承にも困難を来している。またダム関連事業の終息に伴いさらに水源地域の衰退が起きることは避けられないだろう。

水源地域の原風景を取り戻し、生業の基盤を確立するには、目先の一時的活性化策だけではなく、里の生活の基盤であり、元本である農地・林野の整備が急務である。里の活性化には、“やま”の活性化が必須である。

一方、ダム建設は地域の社会生態系だけではなく、自然生態系にも大きな改変をもたらしている。失われた森林植生や生物種とその生育・生息環境を可能な限り復元して行く努力も必要である。自然保護と人間活動の両立・共生が問われている。

自然と共生して生きる山村の生活スタイルや、里山と呼ばれる共生的自然・半自然も下流域住民にとって水源地域の魅力となるものである。

(2) 調査活動の目的

水源地域住民および都市住民が協働して水源林を整備し美しく愛される森林をつくるとともに、快適な里山空間を形成して地域活性化の礎とすること

(3) 全体の流れ

- ① 生業 水源人工林の維持の必要＋人工林を変える必要（社会・自然環境の変化）→
改良・多様化・創造

除間伐励行による健全化 多様な森づくり スギ・ヒノキ一辺倒からの脱却 恵み豊かな森林づくり 特用林産物の見直し 気候変動への対応	→水源林の魅力化健全化・水源地域活性化
---	---------------------

- ② 自然 水源自然林の保護、水源人工林の自然林化

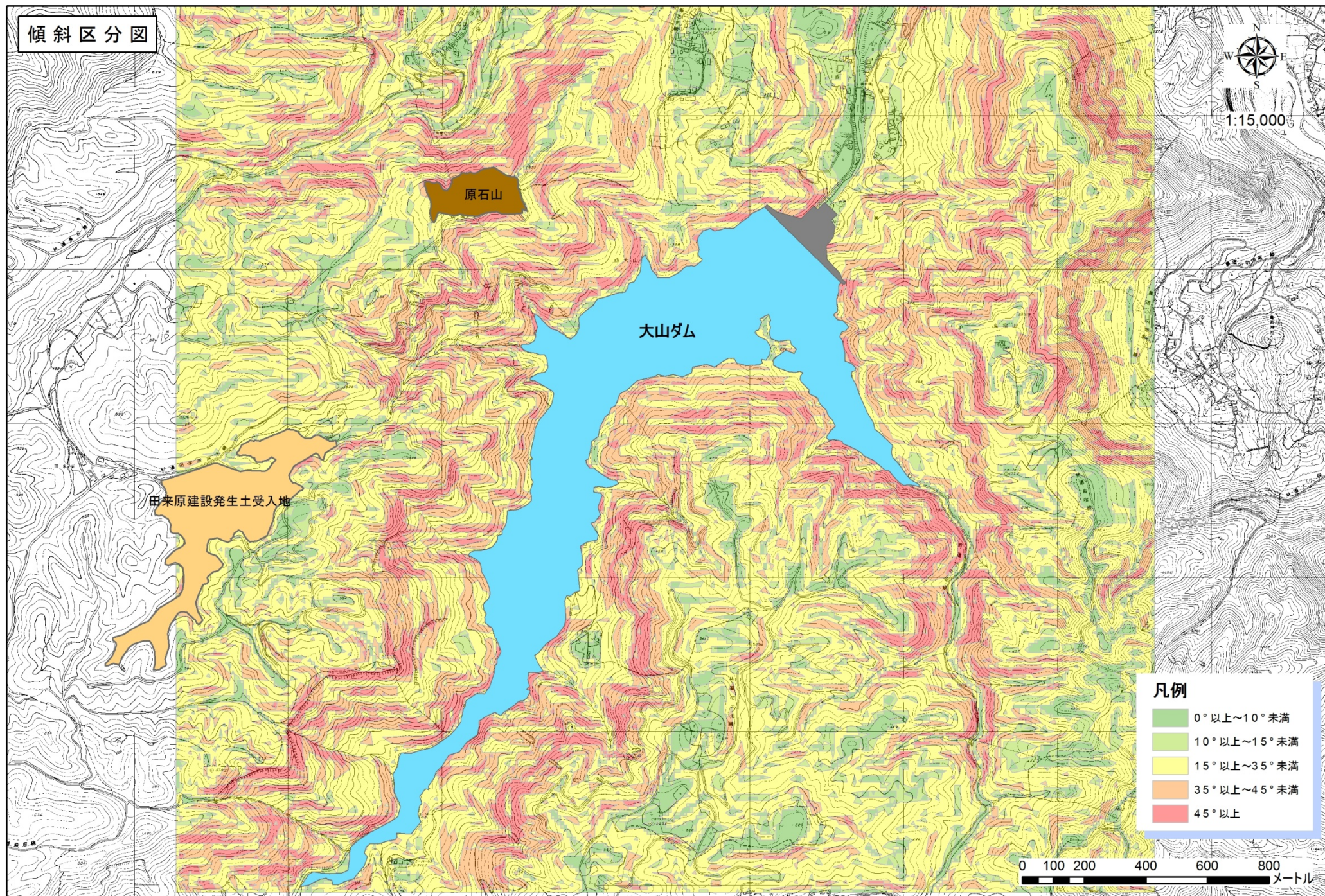
森林立地区分 生物・植生・生態系多様性の回復・増進

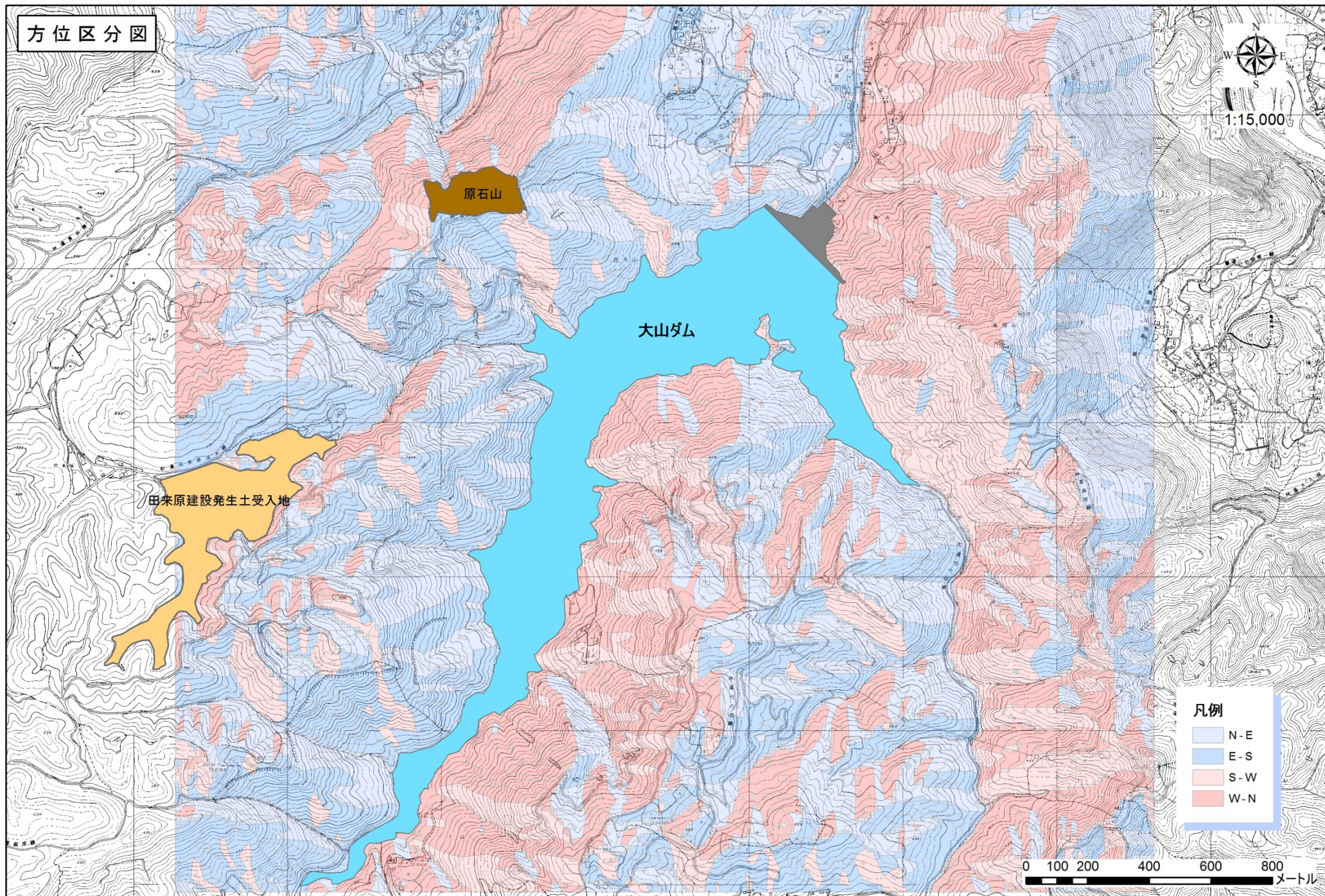
全流域住民の生活の基盤・元本である上流域の自然、自然林を知る・守る・復元する

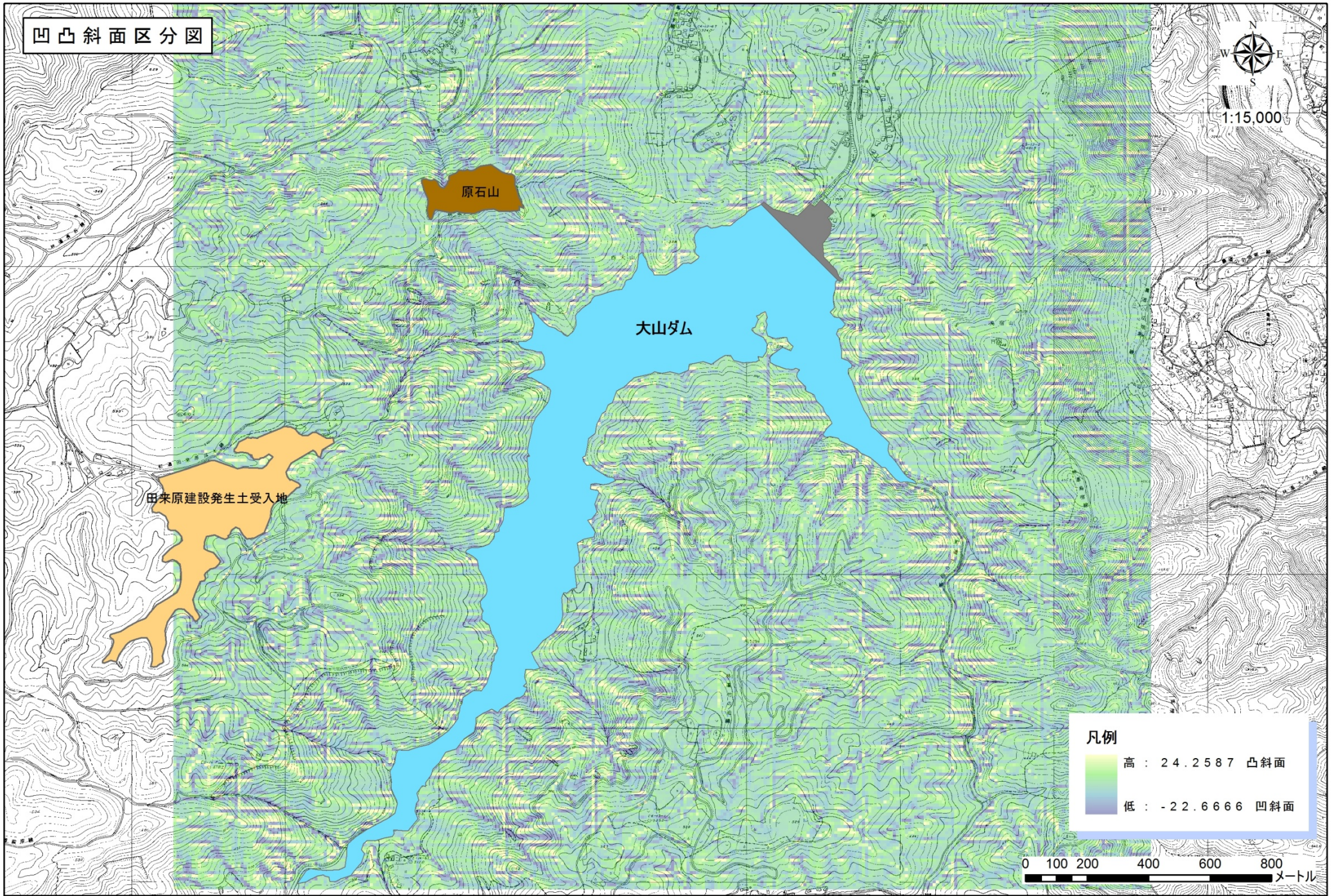
- ③ 地元主導＋上下流との交流・連携・協働

(地元団体・地元高校生実務体験＋下流＝共同参画)

互いに知る・共に働く・共に創る







鳥 瞰 図

